

生物学における目的論的虚構主義

千葉将希

東京大学大学院

「心臓は血液循環のためにある」、「植物は十分な養分と水を得るために地に根をはる」(大塚 2011, p. 8) など、生物学では目的論的言明とよばれるタイプの説明が用いられることがしばしばある。こうした目的論的言明は、生物学においてどのような意味をもつのだろうか。また、これらははたして Darwin (1859) 以降の生物学において正当 (legitimate) な説明といえるのだろうか。これらの問いに関して現在最も影響力のある立場は、生物学における目的論的言明 (機能に関する言明) を過去の自然選択によって理解しようとする「機能の起源説」(etiological theories of function) とよばれる諸理論であろう (e.g., Millikan 1989; Neander 1991)。この立場によれば、ある形質の機能 (存在目的) とは、「当の形質がそのために選択されたところの効果 (the effect for which that trait was selected)」(Neander 1991, p. 459) にほかならず、またそうであるがゆえに Darwin 以降においても目的論的言明は (自然選択が働いた多くの事例に関して) 真なる言明とみなすことができる。たとえば、心臓が血液循環を機能 (存在目的) とするといえるのはなぜかといえば、それは心臓が血液循環という効果をもつために選択されたと実際に考えられるためであり、そうである以上「心臓は血液循環を機能 (存在目的) とする」という言明は文字通りの真理として主張することができるのである。

本発表では、このような機能の起源説に対して、生物学における目的論的言明は一種の虚構 (fiction) であると理解する立場、すなわちわたしが「生物学における目的論的虚構主義」(teleological fictionalism in biology) とよぶ立場を可能なかぎり擁護する。この立場によると、生物学における目的論的言明とは、(行為や人工物にまつわる目的論的言明と同じく、なんらかの意図的行為者の存在を含意する言明であるという点で) 本質的に創造論的・擬人主義的な言明であり、したがって文字通りには偽であるが、それでも有用な虚構としての価値をもつ。以下ではまず、一般に虚構主義とはどのような立場であるかを簡単に確認し、ついで生物学における目的論的虚構主義がどのような立場として特徴づけられるかを論じ、最後にこの立場を擁護するために本発表で取り組む課題を述べる。

一般に虚構主義とは、非常に大まかに言えば、ある談話 (discourse) においてなされる発話を、文字通りの真理を主張したものとしてではなく、真理であるふり (pretense) またはごっこ遊び (make-believe) をしたものとして理解する立場のことをいう (Walton 1990)。たとえば、宗教的虚構主義によれば、「神は存在する」という発話は、

神が存在するという文字通り主張しているのではなく、あたかも神が存在しているかのようなふりをしたものにすぎない (see Scott and Malcolm 2018)。また、虚構主義には少なくとも「記述的な虚構主義」(descriptive fictionalism)と「指令的な虚構主義」(prescriptive fictionalism)の2つがあり、前者がある談話の発話者が実際に虚構に従事しているという記述的な立場であるのに対して、後者はある談話の発話者が虚構に従事すべきであるという指令的(規範的)な立場である(Kroon, McKeown-Green, and Brock 2018; なお、記述的な虚構主義はしばしば「解釈学的虚構主義」(hermeneutic fictionalism)、記述的な虚構主義の否定と指令的な虚構主義との連言はしばしば「改革的虚構主義」(revolutionary fictionalism)ともよばれる(Stanley 2001))。

以上の特徴づけを踏まえ、本発表では「生物学における目的論的虚構主義」を、以下に掲げる2つの立場の総称として提示する。1つ目の立場は、「生物学における記述的な目的論的虚構主義」(descriptive teleological fictionalism in biology)、すなわち、生物学者たちは現に、「心臓は血液循環のためにある」といった目的論的言明を発する際、文字通りの真理を主張しているのではなく、(心臓などの生物学的対象について)あたかも創造論や擬人主義が正しいかのようなふりやごっこ遊びをしているという立場である。これに対して、2つ目の立場は、「生物学における指令的な目的論的虚構主義」(prescriptive teleological fictionalism in biology)、すなわち、生物学者はこうした目的論的言明をあたかも創造論や擬人主義が正しいかのようなふりやごっこ遊びとして発すべきである(現にそれをそうしているかどうかははさておき)という立場である。以上のように「生物学における目的論的虚構主義」を特徴づけたうえで、本発表では、記述的な目的論的虚構主義と規範的な目的論的虚構主義の両方を、ある種限定された仕方擁護することとする。すなわち、少なくとも一定程度の文脈において、生物学者たちは目的論的言明を虚構主義的な仕方発しているし、かつそうすべきだという立場を擁護する。(なお、生物学における目的論的言明は虚構だという立場を、分析哲学で開発された虚構主義にまつわる道具立てを用いて「虚構主義」との明示的な名称のもと擁護した先行研究は(発表者が現時点で知るかぎりでは)見当たらないが、本質的に虚構主義的立場として分類することができる立場は、Ruse (2000) や Lewens (2000) (またおそらくは Kant (1790) やある時期における Dennett) など、幾人かの特筆すべき論者によってこれまで擁護されてきた。本発表の議論もこれらの洞察に多くを負う。)

本発表では、「生物学における目的論的虚構主義」を擁護するという目標のもと、大きく2つの課題を執り行う。第1に、生物学における目的論的言明の意味論に関する考察を行う。とりわけ、生物学において目的論的言明がなされる際に、それを行為や人工物にまつわる目的論的言明と同じく、なんらかの意図的行為者の存在を含意する言明とみなすべきなのかという点について、Lewens (2000) による生物学的目的論に関するメタファー説などを参照しつつ検討を行う。第2に、生物学における目的論的言明の語

用論に関する考察を行う。とりわけ、生物学の研究において、生物学的対象があたかも意図や欲求の産物であるかのようなふりやごっこ遊びをすることにどのような発見法的有用性があるかについて、Ruse (2000) による議論などを参照しつつ検討を行う。こうして最終的には、少なくとも一定程度の文脈において、生物学者たちは目的論的言明を虚構主義的な仕方ですべて発しているし、かつそうすべきだという立場が限定的な仕方ですべて擁護される。なお、生物学における目的論的言明をどのように理解すべきかは、生物学の哲学のみならず、心の哲学や医学・精神医学の哲学など、さまざまな分野に関わる問題である。数学的虚構主義 (Field 1980) や構成的経験論 (van Fraassen 1980) など、科学において虚構が用いられているとする理論はこれまでも存在したが、生物学における目的論的虚構主義は上述した諸分野において一定の含意を与えうるという点で、科学的説明に関する既存の虚構主義とは異なる独自のインパクトをもつことが予想される。